

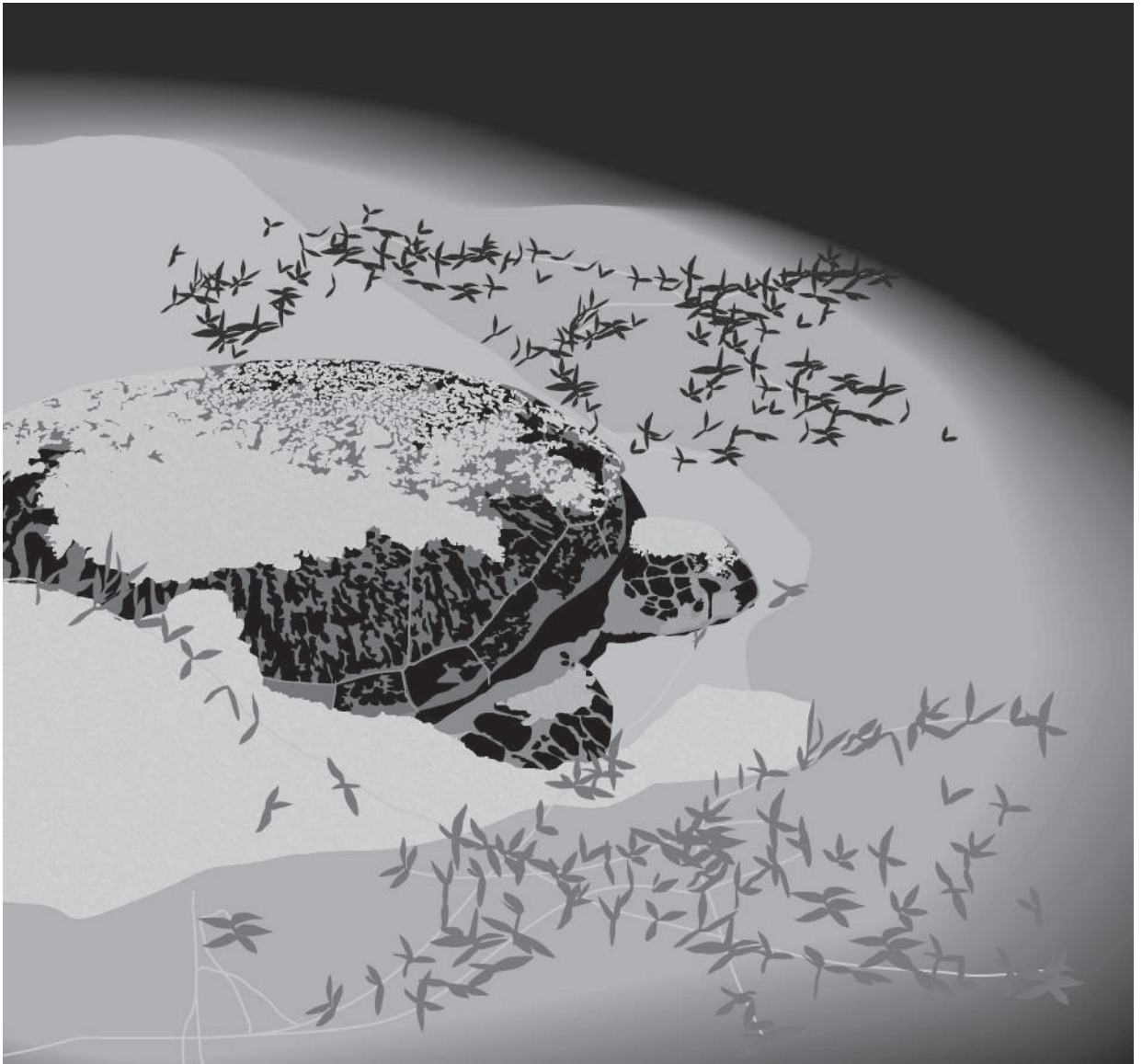


Marine Turtler

マリンタートル

特定非営利活動法人日本ウミガメ協議会機関誌

第27号





表紙の絵
中西 悠 (なかにし ゆう)

4月の終わり、黒島で平成最後のアオウミガメの産卵を見ました。波打ち際から延びる足跡を見つけ、それをたどると母ガメが。波の音の中に砂を掘る音が響きます。音がやむと産卵です。産み終わると2時間ほどかけて丁寧に卵を隠し、海に帰って行きました。この時のワクワク感が忘れられず今回の絵を描きました。



表紙の絵を募集しています！

皆様から表紙の絵を大募集しています。可愛いイラスト、リアルなウミガメ、ウミガメをモチーフにしたデザイン等々、ウミガメに関するものでしたらどんなものでも構いません。ウミガメを見る機会のある方や、日頃から深くウミガメに関わりのある方は、ぜひ一度描いてみてください。皆様からの素敵な絵をお待ちしております。

- サイズ:B5
- 色:自由。(仕上がりはモノクロになります。)
- 期限:×切はありませんが、次号の掲載をご希望の方は、お早めをお願いします。
- 応募方法:大阪事務局に郵送又はメールでお送り下さい。
- 送付先:〒573-0163 大阪府枚方市長尾元町5-17-18-302
日本ウミガメ協議会 マリントートルー編集部
※メールの場合は info@umigame.org まで
件名に「マリントートルー表紙」と明記の上お送り下さい。

会報の名称マリントートルー(Marine Turtler)は、英和辞書には載っていません。米国では、最近ウミガメ関係者をこう呼ぶことがあります。ウミガメを守りたい人や、ウミガメを研究したい人、立场上仕事でウミガメに関わるようになった人、ウミガメが好きな人など、ウミガメに関わる全ての人を、我々はマリントートルーと呼ぶことを提唱します。


Marine
Turtler

Contents

ウミガメ基礎講座 27 大海原の旅人 岡本 慶 ————— 3P

事務局だより

“2回目”の小学校への出前授業 松宮 賢佑 ————— 5P

各地からの報告

ウミガメ産卵シーズンを前に 一野 愛美 ————— 6P

むろと廃校水族館の1年を振り返って 若月 元樹 ————— 7P

その上陸、ほんとうに産んでない? 亀田 和成 ————— 9P

カメハメハ王国の歴史 山本 明男 ————— 11P

新人紹介

カメから貰った気持ち 鋸口 喜仁 ————— 13P

STSmembers募集中!、ご寄付をいただいた方々、編集後記

大海原の旅人

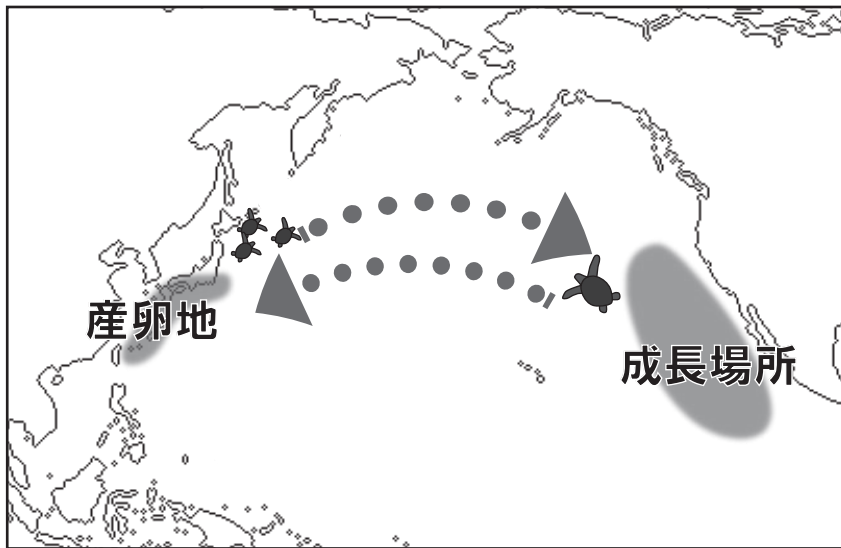
国立研究開発法人水産研究・教育機構 国際水産資源研究所 岡本 慶

新元号の令和となり、早くも一週間が経とうとしています。この一週間、ゴールデンウィークということもあり、旅行された方も多いのではないのでしょうか。南の地域でなければ、海で泳ぐにはまだ少し早いかと思いますが、潮干狩りなどであれば、海に行かれた方もいらっしゃるのでしょうか。海で暮らしているウミガメたちには当然ゴールデンウィークはありませんが、休みに関係なく旅をしながら暮らしています。

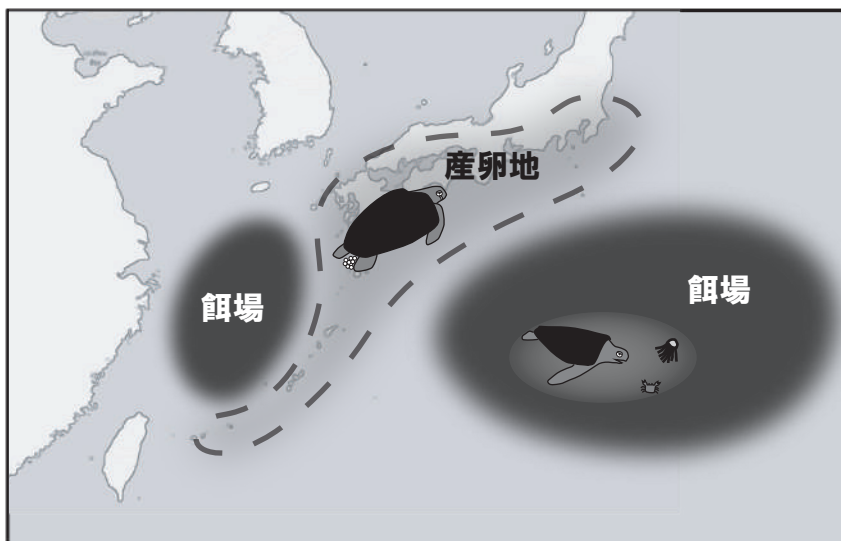
どのような旅をしながら暮らしているのでしょうか。海の生き物たちの「旅」を別の言葉で表すとしたら「回遊」と呼ぶのが最も適切でしょう。ウミガメたちの回遊は、成長のための**成長回遊**と季節に応じた**季節回遊**に大きく分けられます。このうち**季節回遊**では、産卵や交尾といった繁殖することを目的とした**繁殖回遊**と、餌を食べることを目的とした**摂餌回遊**があります。例えば、北太平洋のアカウミガメは日本で孵化した後、黒潮に乗ってハワイからカリフォルニアにかけての海域に移動し、そこで10～20年過ごし、成体になる少し前に日本沿岸に戻ってきます。これが**成長回遊**です。その後、日本近海で成長を続け成体になったら、産卵地と摂餌域を行き来するようになります。これが**季節回遊**です。繁殖期が近づくと餌場を離れ、産卵地を目指して回遊します。産卵前には交尾をしますが、交尾する海域についてはまだよくわかっていないので、オスについては不明ですが、少なくともメスは産卵のための回遊をします。これが**繁殖回遊**です。その後、アカウミガメのメスは、1回の産卵期に大体2週間おきに5回ほど産卵を繰り返します。そして、そのシーズンの産卵をすべて終えると、再び餌場に移動します。これが**摂餌回遊**です。基本的に産卵地と摂餌域はある程度離れていることが多く、北太平洋のアカウミガメでは、東シナ海に回遊する集団と外洋域に回遊する集団がいることが知られています。このように**繁殖回遊**と**摂餌回遊**を繰り返すことは、様々なウミガメで知られています。例えば、大西洋の中央に浮かぶ英国領アセンション島で産卵するアオウミガメは、産卵地と2000kmも離れたブラジル沿岸の摂餌域とを行き来することが知られています。また、最大のウミガメであるオサガメのうち、西太平洋で産卵する集団は、産卵地であるインドネシアと摂餌域であるカリフォルニア沿岸やタスマン海を行き来していると考えられています。

ウミガメたちがこのような回遊をする際、地磁気や水温、海流を利用していると考えられています。しかし、**摂餌回遊**を行う場合、最初にどのようにして餌場を見つけ、どのようにしてそこにたどり着き、なぜその餌場を回遊の度に利用し続けるのかわかっていません。私た

ちも旅行をしていて、たまたま立ち寄ったお店でふとおいしい食べ物にありつけることがあります。私たちの場合、それらの情報はカーナビやスマホに記録することができますが、ウミガメたちはそうはいきません。彼らが備えている能力のすごさに感服させられるとともに、それこそが大昔から生き続けられている理由なのだろうと改めて思います。



成長回遊



季節回遊

“2 回目の小学校” への出前授業

大阪事務局 松宮 賢佑

夏はウミガメ調査で和歌山の砂浜を歩き、秋はウミガメ会議で与論島へ、そして年が変わって冬、海を見る機会はほぼなくなり、事務局でのデスクワークがほとんどになりました。そんな年度末に事務局へ一本の電話がきました。それは「小学校で授業をしてくれませんか？」という出前授業の依頼でした。私たちの事務局は大阪の枚方市にあります。でも、ウミガメ協議会の地元での知名度はほとんどありません。そこで、ウミガメや私たちの活動について知っていただくため、定期的にイベントを行っています。その一つである地元小学校でのレクチャーが縁で、今回の出前授業のお話をいただきました。

私はありがたくこの依頼を受けたのですが、今回は“2 回目の小学校”で授業をして欲しいという話でした。2 回目？と思いつつ話を聞くと、大人を対象にした授業とのことでした。その後の打ち合せで「勉強熱心な大人の方たちですけど、夏休みに子どもたちにお話している内容で構いませんよ」とお願いされました。それでも私は、大人の方にそれも勉強熱心な方に子どもウケを狙ったスライドでは失礼だ、と思い、しっかりと内容を作り直して授業に向かいました。そして、当日クラスに入ると、そこには予想外の光景が…、会場にいたのは私が予想していたよりもはるかに年配の児童たちでした。その場で知ったのですが、“2 回目の小学校”とは、昭和前半生まれ世代の方が子どもの頃に戻って授業を受ける趣旨のもので、67 名いる生徒の平均年齢は 73 歳、最高齢はなんと 91 歳。そして、授業だけでなく、学級委員会があり、朝の会や終わりの会、宿題もちゃんとあるそうです。

色々な驚きがありましたが、およそ 1 時間の理科の授業（ウミガメの種類や産卵についての話）を行い、合間には多くの質問やウミガメにまつわるエピソードもいただきました。私は専門学校でも授業をしているのですが、彼らもこれぐらい積極的に意見や質問をしてくれれば、とってしまいました。授業の最後には、廃校した小学校が水族館として生まれ変わり、文字どおり“2 回目の小学校”としてその役目を果たしている『むろと廃校水族館』の話をしてきました。「遠足やご旅行でぜひ！」と言ったものの、「室戸は遠いわぁ」という意見に、高速バスでも往復 10 時間の苦勞を知っている私は「ですよね…」としか返すことができませんでした。



ウミガメ産卵シーズンを前に

紀宝町ウミガメ公園 一野 愛美

三重県の七里御浜では、4月14日に「第7回七里御浜一斉クリーン作戦」が行われました。七里御浜は熊野市から紀宝町までの約22kmにわたる海岸で、毎年アカウミガメが産卵にやってくる海岸です。このイベントは、毎年アカウミガメの産卵シーズン前に行っています。今年は、役場の職員や地域の方々、ウミガメ監視員ら50名ほど集まり、紀宝町の井田海岸を清掃しました。一人ひとりがゴミ袋を片手に海岸を歩き、漂着ゴミを袋がいっぱいになるまで拾いました。どこからきたかわからないビニール片やペットボトル、ブイ、漁網など、いろんな種類のゴミを見て「人が捨てたものがウミガメの産卵の妨げになるのは悲しいね」「こういうのを見ると、自分の行動を見直す機会になるな」という声もありました。私自身も改めてウミガメのためにできることを考える機会になりました。今年も1頭でも多くのウミガメが七里御浜に来て産卵してくれるように期待しています。



翌週には、紀宝町ウミガメ公園の14周年祭が開催されました。イベントでは、ウミガメとのふれあひも、いつもよりボリュームアップして行いました。いつものカメラタッチに加え、限定のプレミアム餌やり会や、大きなウミガメとの撮影会を行いました。プレミアム餌やり会では、先着20名にスタッフしか入れない柵の内側に入り、間近での餌やりを体験してもらいました。撮影会では、柵の内側に入って1m以上ある大きなウミガメに触ってもらい、記念撮影を行いました。参加した方から「近くで見れてうれしかった!」「普段はできない特別感を味わえた!」という声を頂きました。今年のイベントでは、例年以上に多くの方に参加して頂き、ウミガメに興味を持っていただけたと思います。

本格的なウミガメシーズンの到来に向け、浜歩きや、地域の小学生に向けたウミガメ勉強会などの準備も進めています。6月から7月までの2ヶ月間は、紀宝町ウミガメパトロールと一緒に海岸を歩いてくださるボランティアも募集しています。地域の方たちと協力して、より一層紀宝町を盛り上げられるように頑張ります!



むろと廃校水族館の1年を振り返って

むろと廃校水族館 若月 元樹

むろと廃校水族館がオープンして1年が経過しました。小学校だった施設を水族館にしたので、心躍る場所であり、我々もそれなりに楽しく準備や運営をしてきました。市役所や地元の方々に沢山怒られた「廃校水族館」というネーミングですが、実際にオープンすると、多くのメディアに取り上げて頂き、市民権を得たと感じております。実は、正式名称は「室戸市海洋生物飼育展示施設むろと海の学校」なのです。当初は頑なに「海の学校」と言い続けていた室戸市当局の関係者ですが、最近は公の場でも「廃校水族館」と呼んでくれるようになりました。さて、振り返るには早い気もしますが、この1年で思い出に残ったことを振り返ってみたいと思います。

オープンはGW直前の2018年4月26日でした。期待値が低かったのか、多くの高知県民にとっては突然のミニ水族館オープンだったようです。セレモニーでは恒例の餅まきが行われました。ウミガメの展示は定置網で獲れたアカ・アオ・クロの3種を展示しました。展示物が間に合うのか不安でしたが、漁師さんたちの協力もあり、なんとかすべての水槽に魚をいれることができました。

6月6日、室戸署から電話が入り、警察官と一緒に室戸岬の岩場にはまったメスのアカウミガメを助けました。時期的に、産卵のための上陸であったと思われます。大きなウミガメを岩場から救助するのは大変でしたが、無事に放流した後に「竜宮城に連れていってもらえんと割にあわん」という警察官のひと言が印象的でした。



オープニングセレモニーでの餅まき。室戸では恒例の行事

6月18日にはメキシコで装着された NOAA の標識が付いたアカウミガメが定置網に入り、野生のアカウミガメでは2例目となる太平洋の横断が確認されました。マスコミにも取り上げられ、多くの反響があった出来事でした。

10月には中国でのアカウミガメの密漁事件が発覚しました。3頭に日本の標識が装着されており、そのうち1頭が室戸で放流したアカウミガメということが判明しました。近年、激減していた産卵数との因果関係がありそうです。ところが、メキシコから来たカメと違って、ほとんど反響が無かったことに驚きました。



警官とともにアカウミガメの救助

一般の統一地方選の頃には「立候補予定がないか一応確認させてください」とか、「応援演説は自粛を」などと、今までにないお願いをされるほど、メディアへの露出が相次ぎました。幸か不幸か、私は立候補したり、応援演説の依頼が来るほどの好人物ではありません。

むろと廃校水族館の運営は、2004年から継続しているウミガメ調査を存続するための手段でした。上述した出来事を見ても、室戸で調査を継続させて良かったと感じています。そして、歴代駐在員が積み上げてきた漁師さんとの絆は、水族館という形で発揮され、ウミガメに関するデータの蓄積や標本を公開する場ともなりました。引き続き、学生や研究者が集う拠点としての役割も期待されます。すでに、東京海洋大・三重大・高知大・琉球大のウミガメサークルも訪れ、一般の高校生・専門学校生、大学生も利用しています。卒業研究のフィールドや学芸員実習の受け入れの準備も整っています。マリンターラーの皆さんには、是非とも25mプールで悠々と泳ぐウミガメを見て頂きたいと思います。徳島方面からいらっしゃる方や見学後に徳島方面へ向かう方は、車で1時間半の場所にある徳島県美波町にある日和佐うみがめ博物館にも是非お立ちよりください。



メキシコから放流されたアカウミガメ。
このカメが室戸までやってきた

その上陸、ほんとうに産んでない？

黒島研究所 亀田 和成

「負けました」研究所の新人の言葉である。夜にウミガメの産卵を見て、翌日の昼に産卵巣の位置に目印の棒を立てようと砂浜に行ったが、改めて産卵巣を探しても見つからない。産卵を見たので、産んでいるのは間違いないのだが、探し出せない。もちろん、誰かに卵が盗まれたわけではない。

似たような体験は何度もしてきた。4月上旬にウミガメの上陸があり「これを見つければ今年初の産卵だ」と意気込んで探すのだが見つからない。カモフラージュした場所をすべて掘り返しても見つからず、あきらめた。しかし、数か月後、ほんのわずかに離れたところで卵の殻を見つけてしまった。私的な意見では、南西諸島の一部の砂浜は難しい。それは、砂がとても柔らかいためである。砂が堅いと、カメが掘った場所だけ柔らかくなるので、触った感触でカメが掘り返した場所がわかる。しかし、砂が柔らかいと、どこも同じ感触なので、どこまで掘ればいいのかわからない。特に、柔らかい砂浜でのアオウミガメの産卵巣はとても深い。成人男性が砂浜に寝そべて、手を伸ばして、ようやく指先に触れるぐらいである。試しに測ってみたら、産卵巣の上部で75 cmもあった。ちなみに、本州のアカウミガメは普通30-40 cmである。約2倍の深さである。砂の中では、触れなければ卵の存在に気づけない。例え、1 mmでも離れていたらわからない。その上、この深さ。探すのは難しい。

私たちがモニタリングしている場所に、西表島の南海岸がある。ここは八重山諸島で最大のアオウミガメ産卵地で、シーズン中は数mおきに上陸跡がある。2005年に私が赴任した当初、前任の職員からは「1割も産卵してないよ」と教わった。つまり、上陸が10か所あっても、そのうち1か所しか産んでいないというのである。さすがにそれは無いだろうと思い頑張ったが、確かに見つからない。その後、私は沖縄島北部で活動している嘉陽宗幸氏から指導してもらい、産卵巣を探すコツを覚えた。そうしたら、西表島南岸でも3割は産卵していることがわかった。それでも、一般にアオは5割ぐらいと言われていたので、まだ低い。やはり、この砂浜ではあまり産まないのだろうか、と考えていた。しかし、2008年にこの考えは覆される。



寝そべて腕を突っ込んで卵を探している。こうしないと届かない。

突如としてイノシシがウミガメ卵を食べ始めたのだ。そのイノシシ達は、私がいくら探しても見つけられなかった場所で、易々と卵を見つけるのである。イノシシのおかげで5割以上は産卵していることが明らかとなった。つまり、西表島の南岸は、人が見つけられなかっただけで、産卵する割合は他の砂浜と変わらなかったのである。



イノシシも砂を周りによけながら、体が隠れるぐらいに掘る。

ウミガメ調査を仕事にして10年がたった。だいぶ経験を積んだつもりではあるが、未だに産卵巣をなかなか見つけられない時もある。そんな時「イノシシの力が欲しい」と思ってしまふ。そういえば食材で有名なトリュフを探すときは、ブタを訓練して使うと聞いたことがある。それなら、ウミガメ卵探索イノシシを育てようか・・・。次の私の仕事はイノシシの飼育員かもしれない。



小柄な女性だと、ここまでしないと見つからない。

カメハメハ王国の歴史

事務局 山本 明男

話は平成5年に遡る。当時、私は地元の青年会議所に所属していた。、その中で、青少年開発委員会の委員長を拝命しており、夏の事業「わんぱく塾」の企画実行に携わっていた。私の中学時代からの趣味は「ジョギング」である。学生時代から朝や夜、走り続けてきており、地元に戻ってからは早朝ジョギングが日課となっていた。時折、海岸にタートルトラックが刻まれている事は知っていたくらいだったが、たまたま、その年のわんぱく塾では「アカウミガメウォッチング」という企画が出されていた。委員長をしていた私は「保護団体に丸投げ」を画策していたのだが、当時の相良町に保護団体が無かったのである。そこで、どうせ毎朝 海岸を走るのならば、ウミガメの卵を一カ所に集めて、もし当日にウミガメの産卵を見せてあげる事が出来なければ、子ガメの放流をさせてあげれば良いと安易に考えた。それから、毎朝2 kmの海岸を走りながら卵を集めて回ったら、その数は30巣以上になっていたのである。

幸いにも、わんぱく塾の当日はアカウミガメが産卵に訪れ、子ども達に産卵の姿を見せてあげることができた。卵は近隣の幼稚園に声かけをして、放流会を開いたりして過ごした。翌年も、ウミガメの産卵巣を気にしながら海岸を走っていると、気になる事が出てきた。当時から出現し始めた四輪駆動車である。砂浜を自在に走り回る事から、ウミガメの産卵に支障が出ないか気になって、当時の町役場に「四輪駆動車の砂浜へり乗り入れを規制出来ないか？」と問い合わせると、海岸法という法律があり「何人も自由に海岸を使用する権利」があり、これを規制するには県条例で定めなければならず、個人レベルの陳情ではダメで、団体を立ち上げて活動しないと不可能だと言われた。これがカメハメハ王国の建国に至る切っ掛けであった。



ウミガメの産卵を見に来た親子

団体名に「アカウミガメを守る会」などの意見も出される中で、楽しめる名前にと「カメハメハ王国」と訳の解らない名前に命名され、大王や女王、執事等の役職が提案され、平成9年の建国に至った。その秋、どこで情報を入れたのか、亀崎直樹氏（前ウミガメ協議会会長）

から突然の電話があり、「ウミガメ会議（大方会議）」に参加しないかとの誘いを受けた。その年は行けなかったのだが、平成 11 年に、亀崎氏と当時 参議院議員であった堂本暁子氏を招いて地球環境シンポジウムを開催する事が出来た。その帰途、駅まで送る車中に、堂本氏からは、国際自然保護連合 (IUCN) に加盟しないかとお誘いを受けた。また、亀崎氏からは、2泊3日で子ども達に生物学を伝授したいとの希望が出され、「相良自然環境塾」がスタートしたのである。この塾は昨年の夏季開催で 16 回目を数えている。

この他にも、カメハメハ王国は、ウミガメのストランディング解剖、海岸測量、海岸定点の写真撮影、潜水調査などウミガメだけでなく、周辺環境も含めた総合的な調査を実施している。加えて、地域住民への啓発の為にふるさと講演会、最近ではトヨタソーシャルフェス事業で海岸への堆砂垣設置事業なども行っている。つい最近では、相良自然環境塾の成果から、ウミガメ保護団体なのに、なぜかミシシippアカミミガメの駆除にも乗り出している。

自然保護と言っても難しい場面が多い事にも気づく。例えば、ウミガメの卵を保護区画に移植する事も行っているが、移植しなくても自然孵化に任せた方が良い場合も多い。しかし、自然のままに任せると、昨年のような台風の当たり年には、自然巣が全滅となったりする。多様性を維持しつつ、野生生物を保護するという事は、なかなか難しいものである。これからも、気負わず、楽しみながら、カメハメハ王国の活動を続けていきたい。



トヨタソーシャルフェスでの堆砂垣づくり



アカミミガメの調査

カメから貰った気持ち

むろと廃校水族館 かなくち よしひと 鉦口 喜仁

私が動物に関わる仕事を目指したきっかけは、ある淡水ガメとの出会いから始まります。小学2年のある日、祖父母の家に黒化したクサガメが迷い込んできました。そのカメの飼育をしてみて動物の面白さ、そして、はじめてカメを“かわいい”と感じました。

中学・高校時代は、ぼんやりと動物に関わる仕事がしたいと考えながら過ごしました。大学受験の際に、動物の生態や行動などに関して学びたいと考え、進路を決めました。そして、岡山理科大学に進み、動物園や博物館で働くことを視野に入れ、学芸員資格の取得に向けて勉強しました。大学では両生・爬虫類の研究室でお世話になりつつ、カメの飼育をしました。そんな私をみたウミガメ界の大御所から「修行に行ってい！」と言われ、沖縄県八重山諸島の黒島にある黒島研究所へ訪れ、そこでウミガメなど海洋動物の飼育や展示物の作製を学びました。さらに、地元広島動物園での職業体験を経て、私の中でこれまで以上に学芸員や飼育員という職業に憧れを抱きました。ところが、大学卒業を1年後に控えた私は、いつものようにカメの世話をしていると、ふと動物が好きではあるが、飼育することに関しては向いてないと感じるようになりました。目の前の動物を“かわいい”と思って接している場合が多かったのですが、ただ“かわいい”に留まっていることに気づいたのです。きっと、黒島や動物園の研修によって、私がこれまで思っていたほど動物の飼育は簡単ではなく、気持ちだけでは務まらないと、心のどこかで感じ始めていたのでしょうか。

そこから、動物に関わることから一旦距離を置き、就職活動では動物とは関係ない企業の見学や訪問を経験し、内定も頂きました。しかし、大学4年の夏に転機が訪れました。黒島の研修でもお世話になり、オープンを半年後に控えたむろと廃校水族館の館長になる若月さんに声をかけて頂いたのです。そして、はじめてカメを飼育した時に感じた気持ち、小学校の頃から夢であった動物の飼育員になりたい思いが再燃しました。さんざん迷ったあげく、今の自分に素直になろうと決心し、むろと廃校水族館で働くことを決めました。まだまだ一年目で、飼育や展示等に関して未熟ですが、日々生物と関わり、お客さんとのコミュニケーションを通して、経験を積んでいると実感しています。それに、魚をくださる漁師さんや地元の方々との交流も充実しています。私のはじめて出会ったカメから感じた気持ちを、少しでも多くの人たちに伝えられるように日々精進しています。



ご寄付を頂いた方々

シャディ(株)、吉崎和美、ヤフー(株)、三菱重工業(株)、小林雅広、吉田博明、大内裕貴・喜来、金井澄、小野悦子、長谷川久美子、橋爪優美子、太田英利、四国コカコーラボトリング(道の駅日和佐・かめたろう)、細野広美、奥彩麻里、奥田恭子、ホテル日航アリビラ、串本海中公園センター、山下宮子。
(ご寄付をいただいた順・敬称略)

そして、黒島研究所、みなべ基地、むろと廃校水族館に募金&差し入れをくださった多くの皆様

当会公式 Facebook & Twitter 始めました！！



ウミガメ協議会公式のFacebookとTwitterが始動しました！各調査基地の近況や海の生き物情報をアップしていきたいと思えます。ユーザーの皆さま、ぜひフォローをお願い致します！当会のHPトップでもご覧になれます。

Facebookページ 〈 <https://www.facebook.com/umigame.official/> 〉

大阪事務局Twitterページ 〈 @umigame_info 〉

黒島研究所Twitterページ 〈 @kuroshimaRC 〉

むろと廃校水族館Twitter 〈 @murosui_kochi 〉

Seaturtle goods shop

当会のオリジナルグッズも販売している Seaturtle goods shop がリニューアルオープンしました！会費のお支払いやご寄付にもご利用いただけます。お支払いは各種クレジット、銀行振込、楽天銀行等からお選びいただけます。

アクセスはこちら！
<http://seaturtle.shop-pro.jp>



人気商品!!
当会オリジナル
ステッカー
300円



STSmembers募集中!

STS(SeaTurtleSupport)membersは、ウミガメと共に生きていける自然、環境について考え、その研究・保護活動に協力する人々の集まりです。日本ウミガメ協議会では、当会をサポートして下さるSTSmembersを随時募集しております。皆様のお知り合いで、自然が好きな方、海が大好きな方、ウミガメに興味をお持ちの方がおられましたら、是非入会をお誘い下さい。

入会金:なし
 年会費:個人会員3,000円、団体会員10,000円
 特別会員100,000円
 会員特典:オリジナル会員証&グッズ、機関誌



STSmembers更新手続きについて

会員更新の書類は会員期限終了月に送付させていただきます。会員の皆様のご支援で、ウミガメやそれを取り巻く環境を保全していくことができます。更新月を迎えられる会員の皆様は、是非とも更新して頂ければ幸いです。今後とも当会をよろしくお願ひ致します。なお、すでにご登録いただいている内容に変更がございましたら当会までご一報ください。※学生会員制度2015年度をもって終了しました。



編集後記

昨年、温暖化の影響で、オーストラリアの一産卵地で生まれるアオウミガメは99%メスであるという研究報告がでた。これは海域にいるアオウミガメを捕獲して性別を調べた結果である。衝撃的な内容だったためWeb上ではけっこう話題になった。実は、私たちが八重山諸島で90年代にアオウミガメの性別を調べている。そこで、今はどうなっているだろうと再調査してみた。その結果、90年代はオス:メス=1:2、現在はオス:メス=1:2。あれ?メスが増えていない。そもそもウミガメはオスとメスで生態が違うのではないだろうか。そうなると、メスが多い海域で調査をすれば、当然メスが多くなる。温暖化を否定するつもりはないけど、もう少し海の中のウミガメたちを知る必要がありそうだ。

黒島研究所:亀田 和成



マリンタートラー(日本ウミガメ協議会機関誌)

発行日 2019年6月1日
 発行 日本ウミガメ協議会

〒573-0163 大阪府枚方市長尾元町5-17-18-302
 電話:072-864-0335 Fax:072-864-0535
 URL <http://www.umigame.org> E-mail info@umigame.org